

北野駅の改札を出ると、そこには家はなかった。目の前の低地には、水田が広がっていた。改札からちょっとした傾斜を駆け降りると、田んぼのあぜ道に立てた。正確にいうと、北野駅の改札口から20メートルのところにある小川でシジミが採れた。田螺（タニシ）などは、だれも見向きもしなかった。皆がねらっているのは、径2.5cm以上の大きなシジミであった。2cm以下の小さなシジミは採らない。小さなものは小川に戻してやる。それが常識であった。シジミ採りに夢中になっていると、たまにイモリが浮いてくる。あまりシジミに夢中になっていると、たまにイモリが浮いてくる。あまりシジミに夢中なので、脚に蛭がついているのにも気が付かない。丸々と肥えた蛭をあわてて払い落とす。

年齢が6つ違いの兄と近所の子ども達がそろって京王線で、東八王子から、たった1区間の北野まで乗る。私は3歳か4歳の頃に初めて、兄に連れて行ってもらったように思う。東八王子のすぐ横に船森幼稚園があり、水路に清水が流れていた。バイカモだろうと思える水草が水底に踊っていた。東八王子は国道20号線(甲州街道)に面していた。



東八王子駅

を降り、街道を横切り船森幼稚園へ流れ込む流れをたどると、水量は減るものの、流れは北へ延びていた。この清水で、北野でとってきたシジミを洗うのがいつものやり方だった。

当時、長沼と南平は無人駅だった。北野、平山、高幡不動には駅員がいた。長沼と南平で乗った場合は、東八王子駅の改札で「長沼から」と自己申告で料金を払っていた。百草が無人駅だったかどうかは知らない。私たちの行動範囲の外だったからだ。

当時、京王線の車両は、1両から2両だったと思う。また、東八王子と北野

の間は単線で、革の小さなポケットの付いた直径1メートルの輪のようなものを運転手と駅長が受け渡しをしていた。

秋になると、北野駅を降り八王子方面へ少し戻り、踏切を左へとわたり街道を上って野猿峠まで辿る。右手の雑木林に入り、栗採りをする。山栗だから、あまり大きくはない。多くは、シバクリで、皮が黄色い栗をとる。このシバクリの渋を爪の先で器用にむき、黄色の実が顔を出すやパクリと口に入れる。そのうまいことったら。栗はたいてい家に帰るまでに食べ尽くしてしまう。生栗を食べるから、よくおでき（腫れ物）が脚に出来ていた。

甲州街道に面していた東八王子駅は、私が府中工業高校に勤め始めた頃（昭和38年）、自分が乗り降りしていた駅である。当時は、京王線が国鉄八王子駅に乗り入れするのではという噂もあったが、どうしてか、現在の京王八王子に落ち着いたようである。原町田駅（横浜線）と小田急・町田駅とを結ぶ動線が栄えているのに、八王子駅と京王八王子駅と結ぶ動線はなんとも寂しい。



かつての京王電鉄

東八王子駅前の街道を渡り、坂を新町の交番のほうへ100メートルばかりのぼると、本木という碁会所があった。私はそこへ通いつめていたから、7月の八王子祭りのパレードなどは、碁会所の中から眺めていた。

東八王子駅というと、船森幼稚園とその横に広がる清水の流れる水路、本木碁会所、新町の交番、お酉様の神社が思い出されてくる。それは、あの清水のそこで踊っていたバイカモのように新鮮な映像となって、いつまでも私の記憶の中に残っている。

(2021年12月)